

日越教育交流事始め ーフィールドノートより

ふじ 原 亮 一
藤 原 亮 一

0 フィールドワークへの誘い

ベトナムのホーチミン（以下HCM）ならびその近郊への出張を命じられた。主たる目的はバンバン大学との教育交流協定の実効調整にあった。期間は2011年8月20日より26日までの1週間。帯同者は事務局中田氏ならびコンサルタント佐藤氏である。

本学が台湾に続いてベトナムの大学と交流協定を結んだことは記憶にあった。しかし、その目的や経緯については関心を払わなかった。ところが、学長ほかの人々から、「ベトナムの活気は貧しさを圧倒している」、「江戸や明治の古き良き日本人を見るようだ」といった言葉を聞くうちに、ベトナムに対する強い関心が生まれた。生のベトナム人を是非この目で見たいという欲求が頭をもたげた。出張を奇貨と感じた。

とは言うものの、今回のベトナム行は現地調査や観察が目的ではない。双方の学長が蒔いた教育交流の芽を出し、育てることが本務である。観察はあくまでも余技である。事務局中田氏とコンサル佐藤氏に怪しまれてはならない。ましてや協定校のバンバン大学に迷惑をかけることは避けねばならぬ。蟹の本務に支障を来たさない範囲で観察と記録を行うことにした。

フィールドノートとして、駅前の京王アートマンで「BUNCOBON NOTE」二冊を購入。ノートには「HCM48」と名付けた。

1 フィールドでの視座

現地調査が目的ではないからと言って、調査課題を持たないのでは観察にならない。最低限の視座は必要である。何処で何を見るのか、その結果として何を知りたいのかといった心覚えである。そこで、以下のような心覚えを胸に現地入りした。

心覚え 1：出張中に会うベトナム人を観察する

心覚え 2：出会ったベトナム人の現実を理解する

なお、心覚え 1 についてももう少し考えよう。それは、彼—我の立ち位置の問題である。例えば、バンバン大の教職員にとっての私は仕事のパートナー、学生には日本人の先生。そして、多くのベトナム人にとっての私は観光客、あるいは行きずりに過ぎない。私は調査者ではない。彼らの日常生活の中に或る役割を割り当てられた存在である。日本人、パートナー、大学教授、52 歳男性、良いカモ等々。つまり、私の現地での立ち位置は参与観察者のそれである。

なお、フィールドノート「HCM48」への記録は、8 月 20 日タンソンニャット空港行き JAL759 便の機内観察から始め、8 月 26 日 JAL750 便にて成田空港に到着するまでとした。

2 本稿の構成

本稿は「HCM48」ノートにもとづく現地記録の章と、そこで出会ったベトナム人の理解を試みる考察の章で構成される。記録部分の記述は、原則として時系列とし、項目毎に【起床六時】等の小見出しを付けた。また、出会ったベトナム人は [HCM] の項にまとめて記述する。考察の章では、主として大学の教職員や学生ならびに街の人という括りで検討したい。

記録中のベトナム人については、ニャンさん、商店員等、個人名もしくは職業名で記すことにする。なお、職業で括られる人々は、互いに名前呼びあったり触れ合ったりする関係にならなかったベトナム人が多い。言い換えれば、客や傍観者として私に関わった相手である。なお、個名については、著者以外の人物、団体はすべて偽名としている。

3 フィールドノート「HCM48」より

第一日目 2011 年 8 月 20 日（土曜日）

移動日である。成田より HCM タンソンニャット空港へ。

【JAL759 便機内】

成田空港 17 時 30 分定刻離陸。機材は B767。席は通路側 21C で隣は中田氏。コンサル佐藤氏は中央席を挟み右側に位置し視認できず。周囲は見渡す限り満席。ベトナム人らしき姿無し。ほどなく夜食。和洋から選ぶ。私は白ワインに和食で中田氏はウイスキーに洋食。乾杯。和食を見てそちらが旨そうだと中田氏。おしゃべり、読書、そして映画。

快適な空間。

降下開始。ほどなく HCM アウタースカートが見えた。夜景が暗い。連なり動く淡い光は車であろうか。闇の底の 700 万都市。

【タンソンニャット空港】

21 時 40 分。タンソンニャット空港着陸。定刻より 25 分早い。滑走路の誘導灯が暗い。保安区域に人まばら。入管行列はエイリアンのみ。役人は全く無言。入国目的も聞かない。ハローにもサンキューサーにも無表情。

入管を済ませ空港を出る。熱い。建物外の群集に驚く。旅に出るとも思えない。出迎えには多すぎる人の群れ。日本との時差マイナス 2 時間。

タクシー配車係は機敏。運転手もすばやく荷物を積み走る。空港を出るゲートで運転手が係りにお金を払う。

【ベトナム☆ホテル】

空港よりダウンタウンへ。コンサル佐藤氏いわく宿泊先はベトナムの一つ星クラス。30 分ほどでハイバートゥン通りのホテル到着。思ったより小さい。玄関は全面ガラス張り天井は高い。古いが掃除は行き届いている。北見駅のうら寂れた商店街のホテルを思い出す。コンサル駐在員の志摩氏が流暢なベトナム語でチェックイン。ホテル従業員にウェルカムの表情。

【中華料理店】

四人でホテルを出る。スコールの名残り道路濡れる。ゴミ塵のでこぼこ歩道。つまずいて 4, 5 軒先の中華料理店。エアコン。フロア店員 20 名余。多数はお喋りするグループと TV のサッカー観戦グループ。忙しく働くのは数名。地ビールのグラスに大きな氷が三つ。零時を回り打ち合わせ終了。ホテルに急ぐ。通りに未だ多数の人。子ども混じる。働いているようにも、遊んでいるようにも見えない街人。

【就寝】

大きく厚い木製のドア。鍵に癖あり。部屋は広めのツイン。バスタブの栓が破損。シャワー使う。T シャツ短パン。1 時過ぎる。ケットにもぐる気力なし。

[HCM]

入管職員、空港の群集、タクシー配車係、同運転手、空港ゲート係、ホテル従業員、中華料理店員、夜の街人

第二日目 2011年8月21日(日曜日)

日越学生交流プログラムに参加。宿泊はバンバン大学バリア校のゲストハウス。

【起床6時】

右下肢二箇所虫刺され。中田氏より6時半のモーニングコール。空腹。連れ立って朝食。目当てはベトナムコーヒー。(写真1参照) 匂い味わい玄妙。BLTサンドとチキンヌードル。スープがうまいと中田氏。BLTの味はゼミ学生で作るサンドイッチとおつつかつ。ホテルスタッフ英語あやしい。

佐藤氏と志摩氏が来る。打ち合わせ。本日より三日間は日越学生交流プログラムに参加。佐藤氏のお勧めは学生との同室泊。却下。服装所持品の確認。禪の紐を引き締める。気力横溢。



写真1 ベトナムコーヒー

【寄宿舍への道程】

7時半前チェックアウト。運転手付きレンタカーで移動。(写真2参照) 二時間半の道程。運転手は見た目に温厚。男性30過ぎ。運転も優しい。市街よりフェリーで渡河。(写真3参照)。景観一変。エビ養殖場がえんえん続く。(写真4参照) 大破した2tトラックが道端に放置。二輪か四駆が似合う道。迷う。ガスステーションで小休止(写真5参照)。誰も出てこない。給油機にハンモックが吊ってある。



写真2 レンタカー



写真3 フェリーで渡河



写真4 エビ養殖場の跡



写真5 ガスステーション

【トントンマエ寄宿舎】

10時。日越交流プログラム学生を乗せた観光バス二台と同着（注1）。引率者あわせ60名前後の団。ベトナム学生4、5人が道端で嘔吐。プログラム主催者に挨拶し施設に入る（写真6参照）。

施設長は他出中。本学からのお土産を副施設長に手渡す。日本の福祉施設職員の風。（写真7参照）小学生から高校生までの寄宿生30人弱。山仕事で生活を共にできない親の子どもが入る寄宿舎。孤児も数名。

子どもは屈託無く学生と遊ぶ。（写真8参照）言葉は通じないが笑顔は通じる。日本人に興味津々。（写真9参照）昼食は学生手作りカレー。皆で食す。（写真10参照）

日本人の清潔や衛生概念は馴染まない。居室の明り取りにはガラス無し。小鳥が出入り。洗濯、トイレ用の大きな貯水槽が三つ。水道無し。（写真11、12参照）



写真6 トントンマエ寄宿舎



写真7 副施設長にお土産



写真8 一番人気だったスイカ割り



写真9 私も笑顔



写真10 カレーに使ったお水は



写真11 寄宿舎の貯水槽、他に二つ



写真12 使用後は柄杓で水を流すトイレ

【観光バス壊れる】

14時。バリアに向け移動開始。すぐ激しいスコール。バス遅れる。カオダイ教信者を見る。フェリーで渡河。悪路。バス一台が壊れたと連絡。バリア校に着けるか心配。志摩氏と中田氏眠る。バス動くの報。

16時半。ドライブインでトイレ休憩（写真13参照）。バスと合流。学生がエンジンを押しがけたとのこと。バスの押しがけ前代未聞。

常温保存のミルク売る。理屈不明。少し甘みあり。ソフトクリームに行列。水っぽい味。コーン湿気る。太ったネズミ二匹が棚の下をゆっくり走る。食堂の衛生状態悪い。箸やスプーン、茶碗、グラスの清潔は自分で確保。ゴミ箱と食器返却のバケツは一緒か。（写真14参照）出発後に激しいスコール。



写真13 ネズミの走るドライブイン



写真14 生ゴミとお箸とスプーンと食器

【バンバン大学バリア校到着】

17時15分。バリア校到着。スコールで暗い。ゲストハウスに入る。（写真15参照）バンバン大側から挨拶や施設紹介は無し。避難経路は自分で確認。消防は114。（写真16参照）

学生たちに疲労の色。部屋割り手間取る。夕食場所も不明で誰も知らないとの声。18時。やっと部屋貰う。（写真17参照）ゲストハウスに食堂が無いこと判明。疲労の色さらに深まる。



写真15 吹き抜け二階より



写真16 消火活動のマニュアル



写真17 ベットと寝具

【夕食ワンプレート】

19時。食事は外で準備されているとの朗報。スコール。夜道を10分歩む。ベトナム料理店を貸切。(写真18参照)食事はワンプレート盛りきり。中身はスチームドライス、鶏肉、サラダ、ピクルス、果物。カップには野菜スープ。プレートは幼児食用の型抜きに似る。空腹は最良のスパイス。スプーンとフォークを拭い食す。



写真18 夕食ワンプレート

【地元屋台の客になる】

20時。観光では絶対に体験できない庶民レストラン。歩きながら引率者が言い合う声。ワンプレート代金はバンバン大側に請求すべきか。

露天歩道の屋台満席。酔客は老若男女。子ども連れもいる。どこも大声の談笑。膝高のテーブルを囲み10人が座る。テーブル、椅子とも樹脂型抜き。椅子は銭湯のケロシン椅子より若干立派。

地産地消に舌鼓。足下にカタツムリ。背後にバイク。人が歩く。酒瓶やガラいたるところ散乱。ほろ酔い。

【カラオケの客になる】

ゲストハウスへの道すがら中田氏とカラオケに寄る。店員はみなミニの笑顔女性。飲み物だけと断る佐藤氏。客まばら。カラオケ部屋は店内奥。呼べば女性が付いて一緒に歌う。お持ち帰り交渉もままありとか。

子どもや女性客もいて風俗店では無い。日本のパブかスナックに近い。スイカジュース甘い。22時。ゲストハウス帰還。就寝。夜半に大スコール。

[HCM]

ホテル従業員、レンタカー運転手、昼の街人、フェリー客、学生、寄宿舍職員、収容児童、ドライブイン店員、ドライブイン客、バ・リア校職員、ベトナム料理店員、屋台店員、屋台客、夜の街人、カラオケ店員、カラオケ客

第三日目 2011年8月22日(月曜日)

海水浴場を經由してHCMへ帰る。

【オブジェと犬と鶏】

7時半。青く抜ける空。キャンパス
広大。建物は白亜。芝庭の手入れ見
事。豪壮な建物外観。正門ゲートを背
に校舎。左手ゲストハウス。右手が芝
庭。校舎は一部吹き抜けの潇洒なつ
くり。入り口に巨大オブジェ。(写真
19, 20, 21 参照) HCM に分散する
キャンパスをバリア校に統合する計画
あり。ゲストハウス横の檻に黒茶色
の中型犬。奥には放し飼いの鶏。ど
ちらも声無し。

【ブンタウの街人】

朝食抜きバスより先に街に向かう。
商店、屋台、そして棒手振りがいる。
途中たびたび迷う。誰に何処で道を聞
いても少し先と答える。レストランを
尋ねると食後のマッサージは気持ちよ
いと語る。走行中のバイクに呼びかけ
ても何某か答えてくれる。嫌がらな
いし決して無視しない。お話好きの印象。

志摩氏いわくベトナム人は親切だが
知ったかぶって喋る。人なつっこくて
お節介がベトナム人の特徴とは佐藤氏
の理解。両替後に海水浴場へ。

【海水浴場】

バリア海水浴場はHCMの観光スポット。観光地にしては駐車場が少ない。車で10分
走っても尽きぬ広い海岸。漁船が浮かぶ。街道沿いにはホテル、料理店、魚貝店多い。
昼食は蟹と蝦、貝を堪能。

海の家で時間調整。注文取り来ない。すぐ横のハンモックに寝る若者。運転手が従業員を
探しに行く。コーラ旨い。団体客20人ほどが入るとハンモックの若者揺り起こされる。お
金を貰うとむくと動き団体客に向う。彼も従業員だったと今更に気付く。(写真22, 23 参照)



写真 19 正門ゲートを背に校舎入り口



写真 20 ゲストハウス全景



写真 21 校舎入り口のオブジェ (左にもう一体)



写真 22 海の家



写真 23 無限に広がるビーチ

売店があり売り物もある。足りないのはやる気のある従業員。トイレは有料。学生と合流し砂浜に出る。風が心地よい。貝殻と子蟹の多さに感動。潮の匂いが無いのは花粉症。海水汚染があり地元人は泳がないとのこと。14時。HCM 目指し移動。

【HCM 夜の街人】

17時。ホテル到着。中田氏、佐藤氏と3人で夜の街を観光。客引きのお姐さん中田氏を捕らえにかかる。15メートルほど歩きつつ会話する日本語力に感心。始めて耳にしたベトナム人の日本語はエッチ。

両替屋の前にももの乞い女性一人。疲れ切った身振りと表情。英語も日本語も話せない。観光客相手の土産物屋を冷やかす。片言の日本語で話しかける店員。英語のほうが上手。日本語力は客引き姐さんに劣る。フエ宮廷料理店で夕食。遊ぶ店員無し。ホテルに戻る。

【再び☆ホテル】

ウエルカムバックの挨拶。愛想良いスタッフ。荷物は自分で。初日と部屋変わる。バスタブの排水溝に蓋付く。三日ぶりの湯。天井四隅に20センチ角の穴。窓側の二穴より淡い光来る。使途不明。ハードデイだが疲労無し。シーツに包まり眠る。夜半にゴキブリか鼠の走る音。

[HCM]

バリア校職員、同学生、日越プログラム学生、レンタカー運転手、昼の街人、魚貝店員、土産物店員、海の家従業員、同客、魚貝料理店員、同客、海水浴客、ドライブイン店員、ドライブイン客、客引き、両替店員、もの乞い、フエ料理店員、夜の街人、ホテル従業員

第四日目 2011年8月23日(火曜日)

学生交流プログラム最終日。HCM 農業・農村開発局での活動報告。HCM 市内視察ならびお別れパーティ。バンバン大学の交流担当者と顔合わせ。

【予定は未定】

7時半。すでに暑い。学生たちのホテルへ。農業・農村開発局の都合で活動報告会が午後になる。予定は未定。役人は共産黨員。

班に分かれて市内に出る。同班にバンバン大男子3年生。日本の大学教員と知り私に話しかける。戦争証拠館は始めて行く。HMC学生は行かない。日本に留学したい等。話しつつ同班者を気遣う優しい心根。日本語力は日常会話がやっと。英語を交え会話成立。

【戦争証拠館】

戦争証拠館は高校の文化祭会場を想起。建物外に軍用車両や飛行機、爆弾等が雨ざらし。保存の意志は感じられない。館内の展示も雑。所藏品リスト無し。学芸員は見当たらず。

館内には西洋人観光客も多い。アメリカ人らしき年配者も散見。日本人学生で展示物にショックを受ける者。アメリカ人はひどいことをしたとバンバン大生の静かな言葉。館内あちこちに寄附箱。二度入れる。(写真 24, 25 参照)



写真 24 「revenge!」



写真 25 「no more, dioxin」

キリスト教会と郵便局も訪問。どちらにも西洋人観光客。郵便局から日本へ絵ハガキ出す。局員英語 OK。古切手売りの娘さん佐藤氏を捕らえにかかると。お金が無い買ってと日本語で声かけ。卑しくも切なくも無い可憐で逞しい印象。20メートル以上ともに歩く。佐藤氏が買う。

お昼前に学生と別れ統一会堂へ。あいにくの閉館。佐藤氏お勧めの料理屋へ。近場で45分迷う。熱々の春巻きは絶品。佐藤氏のさし歯の調子おかしい。気の毒で腹に笑い。

【報告会】

スーツに着替え庁舎へ。学生も正装。報告会はHMC農業・農村開発局に対する儀礼的配慮と見えた。1時間で撤収。女子学生の背中にサロンパス。全員ずぶ濡れホテル戻る。

【ハン先生とニャンさん】

バンバン大学のハン先生と会場で会う。流暢な日本語で自己紹介。日本と日本語への

若い頃からの熱い思い。後進を大切に作る温かいお人柄。信頼できる先生と感じた。双方が打ち解け自然体で話す。

話の途中ニャンさん来る。国際交流担当職員。バンバン卒業生でハン先生の教え子。日本語で挨拶交わす。会話能力あり。

【お別れパーティ】

アオヤイと浴衣のパーティ。(写真 26 参照) お互いが着せっこしたという。ベトナム学生は酒好き歌好き。お煎餅を仲良く当分して食べる姿が印象的。パーティ盛況。中座しホテルへ。ダラットワインとピスタチオで中田氏と反省会。



写真 26 日越学生お別れパーティ

[HCM]

ホテル従業員、日越プログラム学生、タクシー運転手、戦争証拠館職員、同客、郵便局員、同客、教会の人、昼の街人、春巻き料理店員、土産物店員、HCM 農業・農村開発局役人、ハン先生、ニャンさん、夜の街人、

第五日目 2011年8月24日(水曜日)

午前中は教育交流の打ち合わせ。午後は学長との面談を予定。

【笑顔で出発】

7時。朝食を取りながら中田氏と打ち合わせ。講演会案を追認して貰えば十分かと。あとは双方の顔合わせ。ベトナムコーヒー堪能。馴染みになったホテルスタッフに明日帰国を告げる。ベトナムティを自分で煎れサーブしたいから是非また来てと言われる。

佐藤氏よりバンバン出席者の情報入る。日本の会議とはだいぶ勝手が違う司会は私に任せてと言う。いつもイージーな佐藤氏が少し緊張気味。さし歯の具合が悪いからか。中田氏と私は笑顔。

【教育交流事始め】

8時50分。現地到着。会議は9時開始予定。双方の挨拶と名刺交換の後、会議始まる。参加者はハン先生、ニャンさんを含めバンバン側5人。バンバン通訳はハン先生。本学側通訳は志摩氏。英語はごく一部ほとんどがベトナム語。正午過ぎまで休み無しに続く。

各自にストロー付きペットボトル水。卓上にはお菓子やフルーツの大皿。どうぞと勧

められる。モシャモシャと遠慮なく食べるバンバン側。また、隣同士で平気でお喋り。携帯メールを打ち電話に出る。断りなく席を立つ人もいた。

日本の会議とは違う。発言は明らかにバンバン側が多い。しかし、大半が要求と自己主張で予定されていない内容。本学が事前送付した教育交流案を理解していない。読んでもいないかと疑われた。また、内輪で言い合う姿もかなり目に付いた。

この人がたは事前の打ち合わせ無しに会議に臨んでいる。バンバン担当者間での意見合意は無いと見た。何も決まらない、決められない、決めなくても良いでは困る。講演会案の追認なかばこちらのゴリ押し。詳細はハン先生と詰めることで合意。(注2)

【ワン学長と面談】

学長室にて面談。教育交流担当者として中田氏と私が学長に挨拶し、来る10月の本学への学長表敬訪問の打ち合わせを行う。打ち合わせ中は無言で無表情。午前中の会議報告を行うハン先生にも言葉少なく頷きで応答。

学長としての威厳を見せているのか怒っているのか。ふと気が付くと卓の下で大きな貧乏ゆすり。一通り打ち合わせが終わると、大阪の大学で教鞭を取った事がある。日本人のことは理解していると話し席を立つ。

夕食はハン先生、ニャンさんと一緒。キノコ鍋店に行く。日本語教育の話ほか。鍋をちよす娘さん19歳。幼さが残る姿でばきばき動く。

[HCM]

ホテル従業員、タクシー運転手、昼の街人、ベトナム料理店員、同客、ハン先生、ニャンさん、他バンバン大教職員、ワン学長、

第六日目 2011年8月25日(木曜日)

ホーチミン滞在の最終日。バンバン大学ダイホク校にハン先生を訪ねる。日本学科の図書室視察。

【図書室】

蔵書のほとんどは日本語。主として小、中学生向けの辞書や読本。日本昔ばなしやアニメ本、雑誌も。日本語教育の専門書は私の見る限り無かった。福祉関連のテキストは本学教員からの寄贈ということであり、私が持参した本学紀要もさっそく配架されていた。十進分類のような基準で配架されているとは思えなかった。司書あるいは司書教諭という仕事はないのか。(写真27, 28参照)



写真 27 日本学科のある校舎前景



写真 28 図書室全景（背後に正面と同じ書棚あり）

ここにある日本語の図書資料はハン先生が翻訳し、いくつかの講義で教材として使用されているとのこと。図書が高価で教材不足に悩んでいる。大学図書館はメインキャンパスに別にあるらしい。

【日本学科のお隣】

ダイホク地区はホーチミン中心部よりタクシーで 30 分ほどの距離。佐藤氏によると、低所得層の人々が住む地域で治安はそれほど良く無い。校舎の窓を開けあちこちお隣を見る。観光客が好んで足を運びたい場所では無いと感じた。（写真 29, 30 参照）



写真 29 図書室の隣人



写真 30 ダイホク校舎隣の建物群

[HCM]

省略

【JAL750 便】

JAL750 便は定刻 23 時 40 分に出発とのこと。富士山が見える座席を押さえた佐藤氏より聞き期待する中田氏。帰りも来るとき同様ほぼ満席。座席は中央右より二席。なんだよ富士山ここからじゃ見えないだろうと大笑い。

食事は洋食のみ。中田氏と私ともにウイスキーのロック。お疲れ様の乾杯。穏やかなフライト。翌 26 日 7 時 35 分成田に到着。帰国。

4 ベトナム人理解に向けて

ベトナムでの滞在日数は正味5日であった。その間に会ったベトナム人の数は [HCM] で示したとおり48人を大きく上回った。ところで、教育交流の協定を結んだバンバン大教職員や学生はHCM生活者である。キャンパスを出れば街の人である。

私がフィールドノートを取ろうと考えたそもそものきっかけは、「ベトナムの活気は貧しさを圧倒している」あるいは「江戸や明治の古き良き日本人を見るようだ」という言葉に魅せられたことによる。これらの印象はベトナムを視察した日本人の目に映ったベトナム人の現実である。ではベトナムの人々は彼らの現実をどのようにとらえているのであろうか。街と大学のベトナム人に焦点をあてて考察する。

A 街のベトナム人

街中がバイクで埋まっている。とくに通勤時間の混雑は著しい。(写真31,32参照)クラクションと排気ガス。歩道を平気で走り回るバイク。川のように流れるバイクを悠然とかわし道路を横断する歩行者。市場の喧騒。食事の賑やかさ。昼寝もバイクの上。(写真33参照)タクシーも多い。これは昼の街人たち。

しかし、夜も人の出は絶えない。相変わらずバイクは多い。街中を子連れで夜歩きする人々とたびたびすれ違った。空港で大勢の人を見たのも夜。街は昼夜を問わず活気に溢れる。平均年齢30歳の国。活気が無いわけがない。

街の人は皆よく喋りよく動いていた。「貧乏ひま無し」、「稼ぐに追いつく貧乏無し」という言葉が思い出された。「働けど働けどわが暮らし楽にならざり」と嘆息しつつ自分の手を見ているベトナム人には出会わなかった。自殺はこの数年で一件。殺人や強盗事件もまず無いという。

皆が笑顔を浮かべていたわけでは無い。しかし、表情が生きている。目力があつた。他人と視線を合わせることは厭わない。交通事故を一度も見なかった。運転手と歩行者



写真31 昼を走るバイク



写真32 夜を走るバイク



写真33 街人の昼寝

のアイコンタクトがしっかりあるからと佐藤氏は説明してくれた。私は蚊柱理論を提唱した。ゆらゆらサッと歩行者や対向車を避けあるいは包み込み、走り続けるバイクと車の群れ。

KFCで飲んだコーラは20円。チキンとビスケットに野菜スライスが付くと200円。日本よりはぐっとお安い。しかしながら、家電やパソコン、バイクの価格は日本と大差ない。ベトナムの大卒初任給は1万3～4千円。街の平均給料は6千円ほど。ホテルで、お店で、街頭で、ハードかレイジーか、身体か口だけかの差はあるものの、とにかく動いていた。オンでもオフでも。

余談ではあるが、街の人と郊外の人では明らかに違っている。寄宿舎へ向う途中に出会った郷人は、裸足で着るものも粗末。道端で鳥や小動物を売る、釣りをする、雑貨店の店番はハンモックで揺れていた。ほとんど商いは無いのではと思った。活気は無かった。街が動なら郷は静の世界であった。豊かな国というのは隅々に暮らす人まで豊かなのだという宮本常一の言葉が思い出された。

B 大学のベトナム人

ベトナムの学生は学びに意欲的。バンバン大学の4つのキャンパスを訪問しての印象である。教室の外でも学生は勉強していた。暇を持って余しボケらつとする若者はいなかった。学び終わればすぐバイクで何処かへ消える。バイト先に急ぐか別の学校に通うかだと佐藤氏から教えられた。大学は学ぶところ。卒業すれば高所得が待っている。

日越学生交流プログラムで知り合った学生は日本に留学したいと話した。日本語がもっと上手になりたい。日本の大学では経済学を学びたいと言う。その先は未定。とは言え、恵まれた生活を保障する仕事と収入を夢見ていることは間違い無いだろう。学びに対する食欲さは、幕末明治の日本の若者に重なるかも知れない。

ベトナムの大学教員は、国、私立の別なく副業を持っているとのこと。あるいは、教員が副業といっても過言ではないという。副業を持たないと生活できない先生が多い。大学の教え子を引き抜いて自分が経営する専門学校に入れてしまう先生もいると佐藤氏から聞いた。(注3) 大学教授という肩書きが、本業の稼ぎにプラスになる先生もいるし、稼いだお金をベトナムの人材育成に役立てる思いの先生も皆無ではないようだ。

一方で、教員の学歴やキャリアパスが明確では無いと感じた。米国の大学教員であれば、何処で何年に学位を取ったかが挨拶の始まりである。バンバン大学で米国留学したと聞く先生とお話したが笑顔ではぐらかされた。何の学位なのかもわからなかった。しかしながら、学びの姿勢や熱意は学生以上に強く感じられた。

バンバン教育交流の打ち合わせにおける教員からの強い主張は、自分が知りたいこと学びたいことを講演のテーマにして欲しいというものであった。日本の教育水準はベトナム

より高い、との認識に立ち教を請う先生の姿であった。こうべを垂れること無く、毅然とあるいは少し威張った態度で。お雇いが見た日本人の印象もこんな風であったろう。

たしかに「古き良き日本人」と重なる姿があった。教育の大切さを疑わず、向学心に燃え、より良い生活を目指そうとする人々。しかし、ベトナムの人々はこの営為の完遂を他者の善意に頼りすぎてはいないか。幕末から明治にかけての海外視察、お雇いの招聘費用を日本人は諸外国におねだりしなかった。日本人とベトナム人の大きな違いがここにある。

国家から国際社会、そしてグローバリゼーションの世界へ。新興国ベトナムは、いわゆる先進国から多大な迷惑を被った。エビ養殖場を見た私は日本人として大変こころ痛んだ。償いは求めて当然である。富む者が貧しい者を援助するのに何の不都合があろうか。私が出会ったベトナムの人々が、昂然と胸を張ってこのように言い切るのであればこんなに嬉しいことは無い。

4 注

- (1) 「南遊の会」という日本 NPO が主催する「植林・交流ツアー」が正式名称である。趣旨は、マングローブ植林、環境教育、ならび日越学生の交流である。N 大学の F 教授が 10 年前から学生と参加しており、教育交流の成功事例と見做して体験参加した。
- (2) お雇い BH チェンバレンの記録に「この国（日本）では物事がすぐには運んでいかないのである。一時間かそこらは問題にならない、、、激しく怒っても事態はいつかに改善されないのである」（p54）というくだりがある。この会議でのバンバン教員の私の印象にぴったりである。
- (3) 学校という名称は同じでも実態が異なる場合もある。お雇いの W ゲンショレク (p280) は、日本では医学の知識と手技の学びは修行であり修業就業に定め無し。学んだ事柄は門外不出。教授法は本を読み各自が先生に質問する方式であるとして、ドイツの医学教育との違いを記している。ベトナムの学校教育、師弟関係はどうであろうか。学びは修行で弟子は抱え込むものなのであろうか。

5 参考資料

秋葉まり子 編 2008 『いまベトナムは』 弘前大学出版会

アジア農村研究会編 2005 『学生のためのフィールドワーク入門』 めこん

梅本昌男 2011 「加熱する教育ブーム」(p8) 『AGORA 2011 August』 JAL

ゲンショレク、W 1993 『評伝シーボルト』 真岩啓子訳 講談社

チェンバレン、B.H. メーソン、W.B. 編 1988 『チェンバレンの明治旅行案内』（1891年 第三版 楠家重敏訳） 新人物往来社

外務省ホームページ「ベトナム社会主義共和国」、「最近のベトナム情勢と日ベトナム関係」（アクセス 7/24/11）

JETRO ホームページ 「ベトナム」（アクセス 7/24/11）

謝辞 今回のベトナム出張に先立ち感染症や病気の予防について内科医宮下宏一先生に懇切なアドバイスを頂いた。深く感謝申し上げます。